

『絵入源氏』三種類の本文異同——「帚木」巻から——

Differences across three kinds of “*virigenji*” text: A case study of *Hahakigi-maki*

沼尻利通

NUMAJIRI Toshimichi

(国語教育)

(平成二十六年九月三十日受理)

はじめに

山本春正により、慶安三年（一六五〇年）に『絵入源氏物語』（以下、『絵入源氏』）の初版が出版された。大ぶりの本で、本文の漢字にふりがなを付し、読みやすくする工夫がなされた、画期的な本であった。これは「慶安本」と呼ばれている。この『絵入源氏』を横長の判型に仕立てなおして、万治三年（一六六〇年）に、渡辺忠左衛門により出版された本がある。この本は、「万治本」と呼ばれる。慶安本のひらがなを、万治本では漢字に改める傾向がある。万治本は、版面に字を多く詰め込んで、紙を節約したかったようだ。万治本のような横長でなく、現在の文庫本ほどのサイズ、いわゆる袖珍本も作られた。刊記は不明であるが、寛文六年（一六六六年）よりは以前に刊行されていることが、書籍目録などで確認できる。この本は「無刊記小本」とも「小本」（以下、「小

本」とも呼ばれる。小型本は、漢字が潰れて表記しづらい。そのため、ひらがなを多く用いる傾向がある。

このように、『絵入源氏』には、大本の慶安本、横長の万治本、小型の小本、の三種類がある。吉田幸一は三種類すべてに山本春正がかかわったとしていた¹が、後に清水婦久子によって、それは否定された²。山本春正がかかわったものは慶安本のみで、万治本、小本の制作にはかわっていないようである。また、万治本、小本の制作者が同一であるとする積極的な根拠もない。慶安本を祖として、万治本、小本それぞれが、別人の手により制作されたと考えられる。

『絵入源氏』の慶安本、万治本、小本の三種類には、それぞれ異同がある。異同と一口に言っても、字母レベルの異同や、漢字やひらがななどの表記レベルの異同などもあるが、本稿では本文異同、すなわち本文レベルでの三種類の本文の異同を、「帚木」巻に限定して考察してい

たい。

一、『絵入源氏』慶安本の本文

慶安本は、万治本、小本のもとになった本である。もとになった本であるなら、間違いのない本、すなわち疵のない本と考えがちであるが、それは誤りである。慶安本にもミスがある³⁾。

慶安本に、「さるべき／＼とはいらへ聞えなどして。」(四六丁オ・／＼)は改行。二重傍線は引用者による。以下同じ)との箇所がある。「さるべき」で改行され、次の行の冒頭から「とはいらへ：」がはじまる。この改行の冒頭「とはいらへ」の「と」は一画目が長いため、もとは「この合略仮名と推測できる。合略仮名「こと」が、板木の「こ」が削れて、「とはいらへ」となったのである。万治本は、この箇所をそのまま継承しており、「さるべきとはいらへ聞こえなどして。」(六七丁オ)とある。小本は「さるべきこと／＼はいらへきこえなどして。」(四六丁オ)であり、「こと」の合略仮名にしている。小本は慶安本の瑕疵を補っていることになる。これは板木での瑕疵であるから、制作者山本春正の責めに帰すものではない。制作段階のどこかで生じたものである。

このようなミスだけではなく、明らかな誤謬もある。慶安本に「をさへせせてなんと聞えさせよ。」(四九丁ウ)との箇所。万治本は「をさへせ／＼せてなんと聞えさせよ。」(七〇丁オ)と慶安本と同じ。しかし小本は「を／＼さへせせてなんと聞こえさせよ。」(四九丁ウ)である。この箇所、「をさへせせて」では意が通じない。「をさへさせて」ならば意が通じる。慶安本「せせて」の「せせ」は、字母が「世世」であるが、二重傍線部の「世」は崩した形であり、「さ」の字母「左」を崩した形に近

似する。あるいは、山本春正が、「左世(させ)」で書いたつもりが、「左」の崩し方が「世」とも読めるように書いてしまったがために、筆耕か板木職人が間違えて「世世(せせ)」としたとも考えられる。いずれにせよ、慶安本を忠実に読むと、意が通らない。万治本は、慶安本の誤謬をそのまま引き継ぐことが多いが、小本はそれを改める傾向がある。すなわち、小本は慶安本を「読めている」本である。

このように、慶安本に瑕疵があった場合、その欠を補う本文は小本であることになる。慶安本を底本にして校訂本文を作る場合、まず参照されるべきは小本であり、次に万治本となろうか。良くも悪くも万治本は慶安本を機械的に写しており、慶安本の誤謬も引き継いでしまうことがあった。

二、『絵入源氏』万治本の本文

慶安本を機械的に写していったのが万治本であるが、そのさいに、いくつかミスをおかしている。特に慶安本の「に」を読むことが、万治本は苦手であつたらしい。慶安本の「えらはむに。」(八丁オ)を、万治本は「えらはんも。」(三三丁ウ)とする例や、慶安本「たちろきに。」(一三オ)を、万治本「たち／ろきも。」(三七丁オ)とする例に見られるように、慶安本の「に」を、万治本は「も」に改めてしまう。慶安本の「に」は、「爾」の字母を用いるため、鏡文字とすると「も」の字母「毛」に見えなくもない。あるいは、版下書きのミスかもしれない。他にも、慶安本で「まからざりしに。」(二九丁オ)が、万治本で「まからざりし」(五二丁オ)と、「に」を落とす例がある。万治本は慶安本の「に」は苦手であつたようである。

ほか、字母を読み違えて誤植にいたる例がある。慶安本「これなんえたもつまじく」(二七丁オ)は、万治本で「これなんえたもほまじく」(三〇丁オ)となっている。これは「つ」の字母「津」を、万治本は「保」と取り換え「本」の字母に改めたことによる誤植である。「つ」の字母「津」と「ほ」の字母「保」は似ているため、取り違えてしまったと推測できる。「帚木」巻での「つ」の字母の使用状況⁴は、慶安本は「川」が二六四例と圧倒的に多く、「津」は八例、「徒」は三例と少ない。万治本もそれに似て「川」が圧倒的に用いられ、「徒」をわずかに使うが、「津」の字母を万治本は用いない。万治本を写した人物は、「津」の字母を使う習慣がなく、それ故に「津」の字母を「保」と誤解したのであろう。

万治本と慶安本を見比べていくと、「は」と「わ」を取り違える例もある。慶安本「わらひ」(三二丁オ)が万治本「はらひ」(五三丁ウ)、慶安本「あはせ」(三三丁オ)が万治本「あわせ」(五四丁ウ)、慶安本「哀にも」(三三丁オ)のふりがな部分を、万治本は「あわれにも」(五四丁ウ)とする。このように、慶安本の「わ」を万治本で「は」に改める、あるいは逆に慶安本の「は」を万治本が「わ」に改める例がある。万治本は誤植も多い。慶安本の「なべてはあらねど」(四丁ウ)の「ね」を落として「なべてはあらど」(万治本・二九丁ウ)とする例。慶安本「あやなき」(一〇丁オ)を万治本「あやしき」(三四丁オ)。慶安本の「こぼれそめぬれ」(二二丁オ)が、万治本では「こぼれこめぬれ」(五三丁ウ)となっているように見える。ここでは慶安本は、「そ」の字母「曾」であること明らかだが、万治本は「こ」の字母「己」が連続しているのか、「曾」なのか、曖昧に描かれており、判断に迷う。書き手が「そ」である自信がなかったのではないかと推測したくなるどころ。

慶安本の「なん侍し」(二〇丁オ)のふりがな部分を、万治本はうまく写せなかったようで、ふりがな部分が「とり」のように見える箇所(四四丁オ)もある。慶安本「さるまゝには」(三一丁ウ)の踊り字を落とし、万治本「さるまゝには」(五四丁オ)にする例などもある。このように、誤植⁵が多く、万治本そのままではとても読めない本になる。

万治本は、右にみたように、明らかな誤植があるが、誤植なのか、意識的な改訂なのか、わからない例がある。慶安本の「またの日小君」(四七丁オ)は、万治本では「またの日の小君」(六八丁オ)と「の」が添加している。この箇所は、「の」の添加によって読めなくなるレベルのものでない。意識的な改訂の可能性もある。ただし、『絵入源氏』に先行する、江戸時代の古活字本や整版本をみても、この箇所を万治本のごとく「の」を添加した本は見当たらない。まれに「またの日に君」とする本⁷を見いだすことができるが、これは「小」の漢字が、「に」の字母「爾」と似ることから生じた、あるいは逆に字母「爾」から、漢字の「小」を当てはめることから生じた異同である。「の」の添加とは関係がない。古活字本・整版本ではなく、古写本まで範囲を広げても、万治本のような「の」を添加した本は見当たらない。これは添加した「の」の前にある「またの」の「の」に引きずられて、「の」を添加してしまったミスと判断してよいように思われる。

万治本を制作した人間は、それなりに古典の素養があったことは疑いがない。ただ、万治本の制作にあたっては、慶安本を機械的に写すことに徹しており、別の本文により校訂するという意識はなかったように考えられる。また慶安本のミスをそのまま継承するなど、「読めている」とは言えない。慶安本を写すさいにも誤植が多く生じていることから、いささか粗忽な態度であったことは否めない。

三、『絵入源氏』小本の改変

『絵入源氏』の小本は、慶安本を小型化したものである。ただ、小型化されているがために、大型の慶安本を一言一句違わずに縮小することはできず、潰れやすい漢字をひらがなに直すなどの手直しをする。そういう箇所を目をつぶれば、ほとんどの本文は、慶安本と一致している。ただし、慶安本の本文のすべてをそっくり引き写したとは言えない。小本は、別の本で校訂しているのではないかと疑われるところがある。

『絵入源氏』の慶安本、万治本、小本ともに、本文の傍記に「イ」を付し、異文注記を付すことがある。慶安本に付せられた「イ」は、万治本、小本に基本的には継承されている。「帚木」巻では、異文注記は慶安本に一例確認できる。万治本も慶安本と同箇所「イ」の異文注記を付す。しかし、小本独自の異文注記が二箇所ある。すなわち、慶安本の一例にプラスして、小本は二箇所、独自に異文注記を付しているのである。その二箇所は、「をも／むきにみえて。」(五丁オ)と「かみがかみにうちをき侍ぬ。」(七丁オ)である。この箇所の慶安本と万治本を見ても、異文注記はない。小本が独自に異文注記を付すところである。

一つ目の「をも／むきにみえて。」を検討してみたい。慶安本は「をもむきも／みえて。」(五丁オ)で、異文注記はない。小本は、本行本文「をも／むきにみえて。」の「に」の傍らに「もイ」とする。異文注記の「も」に該当する本文「をもむきも」は、慶安本と同じであり、慶安本の本文を異文扱いしている。この箇所は、小本は慶安本の本文を「イ」とし、「をもむきに」を本行本文として採用している。では、この「をもむきに」は、何らかの文献的な根拠があつての訂正なのだろうか。調

査すると、小本より先行する古活字本、整版本、さらには写本でも、「をもむきに」とする本はない。どの本も「をもむきも」で、慶安本の本文と同じ。小本が採用した「をもむきに」の本文は、現状では不明とするほかない。いま一つ小本の「かみがかみにうちをき侍ぬ。」は、慶安本は「かみがかみにうちをき侍ぬ。」(七丁オ)で、異文注記はない。この箇所は、先の例とは逆で、本行本文は慶安本と同文で、異文注記は慶安本とは別の本である。小本の異文注記「かみがかみは」の本文は、文献的な根拠が確認できる。江戸時代初期の本に限れば、慶長初年刊本、伝嵯峨本、九大古活字本、無跋無刊記本で確認できる。もちろん、慶安本の「かみがかみに」も、寛永中刊本一種本で確認できる。こうしてみると、小本は何らかの本によって、本文を訂していることは疑いがない。といっても、他本と慶安本の本文を事細かに比較し、訂していくのではなく、慶安本を尊重しながら、部分的に訂する姿勢である。その訂正は、何かの本に拠っている場合と、拠っていない場合があるようだ。

また、この小本独自の異文注記は、「帚木」巻の冒頭部の五丁オ、七丁オにある。雨夜の品定めが始まることから、左馬頭の弁までの部分は、小本は異同が集中しており、この異文注記もその範囲にある。慶安本と小本に集中してあらわれる異同を見ていく。

① いへのう／ちにたらはぬことなどはたなかめるまゝに。(六丁オウ)

② すべてにぎは、しきに／よるべきなめり。(六丁ウ)

③ まことのうつはものとなるべきをとりいださんには／かたかるべし。(八丁オ)

④ いきのしたにひきいれつ、ことすくななるが。(九丁オ)

①は、頭中将の台詞。非参議の四位の箱入り娘のさまを、「家の内いへうちに足らはぬことなど、はた、なかめるまゝに」と表現している。この「たらはぬ」は、慶安本は「たら／ぬ」(六丁オウウ)とある。慶安本の文は、六丁の表から裏に切り替わるところで、小本は慶安本を写しながら「は」を加えてしまったミスなのではないかと考えられるところである。「たらはぬ」とする小本のような本は、他本では見当たらないことも、その考えを裏付ける。とは言え、小本の「たらはぬ」は、あながちに誤謬とも言い切れない。ハ行四段活用「足らふ」の未然形としても読みうるからで、文法的なミスとは言い切れないのである。衍字は、誤って混入した余分な字であるから、意味が通らなくなるのが普通である。「たらはぬ」であっても、意味が通るのであるから、この箇所は衍字とは言えない。むしろ、小本は「たらはぬ」とする慶安本ではわかりづらいと判断し「は」を加えた「たらはぬ」と改めたのではないかと考えられる。

②は、光源氏の台詞で、頭中将の台詞を受けて「すべて賑にぎははしきによるべきなめり」と雑ぜ返すところ。この「べきなめり」は、慶安本は「べき／な、り」(六丁ウ)としている。慶安本は「なり」と伝聞の助動詞であるが、小本はそれを「めり」と視覚的推定の助動詞としてとらえる違いがある。小本の「めり」と同じ他本はなく、多くの本は「なり」にする。ここは会話による推測だから、伝聞推定の助動詞としてとらえたほうが「正しい本文」ということになり、小本は誤った改変をしたと指摘されることになりうか。本稿は、「本文の正しさ」を講究したものではないため、本文の良否については今は述べない。とにかくも、慶安本の「なり」を小本は「めり」と改めた事実は確認しておきたい。さて、今日では画然となっている聴覚の「なり」と、視覚の「めり」は、実は江戸時代においては混同されていたようである。中島広足の『檀園

隨筆』(草稿卷二)では、「めりは、なりとおなじ意なるもあり¹⁰」との記載があり、石川雅望『雅言集覽』にも、「メリはベシといふ心にて推量にもいひ又ナリといふ心にもいふ也¹¹」とある。源氏物語の写本でも「なり」と「めり」の交替現象が確認されている¹²。どうやら昔の人々にとって「なり」と「めり」は容易に置換できる助動詞だったらしい。我々は、伝聞「なり」と「めり」は違うと軸足を置いて教育されているため、小本のような変更は許しがたい改悪と評されようが、江戸時代のように、伝聞「なり」と「めり」は同じ、または似ると軸足を置いた世界では、小本の改変はごく自然なものにとらえられていたと考えられる。

③は、左馬頭が、男で大器となる人材を選び出すのは「難かたかるべし」と論じるところ。慶安本は「かたかるべしかし」とする。「かし」は終助詞で、話を相手に持ちかけるニュアンスがある。現代でいえば「くだねえ」などと言う「ねえ」にあたる。江戸時代の古活字本や整版本は、すべからく慶安本に一致し、小本のような本はないが、ただ写本では、伝冷泉為秀筆本(静嘉堂文庫本)が「かし」のない小本と同じ本文を持つようである。

④も、左馬頭の言で、「容貌汚かたちきたなげなく若わかやかなるほど」の女の姿が描かれている場面で、やつとのこと声を聴ける距離に言い寄ったものの、相手の女が「息いきの下したにひき入れつ、言こと少ななる」様を描いている。この「つ、」は、慶安本にはなく、「ひきいれ、ことずくな」となっている。「つつ」とする本は小本のみで、古活字本・整版本・写本にも確認できない。この箇所の二行前に「おもはせつ、」があるため、ここからの目移りが疑われるところだが、ただ「つつ」があっても読めるところである。

以上、小本は五丁オから九丁オにかけて、慶安本を集中して改変している。その改変は、助詞や助動詞の添加、削除、変更であった。どれもが微細な変更であり、慶安本とかけ離れた異文となるようなものではない。また、改変することによって、文章が読めなくなるといふ性格のものではなかった。これは、小本の制作者は、物語が「読めていた」ということを示している。万治本の改変の場合は、多くの場合は制作者側の単純な誤りで、それ故に文章は読めなくなることが多かった。しかし、小本の改変は、文意が通じなくなるものではない。衍字なり脱字をするならば、文意が通じなくなるのが普通である。しかし、小本は文意が通じなくなる文章ではなく、読解にたえるものである。このことから、小本は源氏物語が「読めていた」人物の手になるものと考えた方がよさそうである。「読めていた」人物が、盆栽の枝葉を刈り取り整えるがごとく、慶安本の本を微妙に改変したものが、小本の本文である。

四、『絵入源氏』小本の本文

小本は五丁オから九丁オにかけ、慶安本の本文を集中的に改変したが、これ以後も、断続的に本文を微調整していく。まとめると、

- ⑤ とかくな／びきて。(一六丁オ)
- ⑥ ざるへきものつねより心とゞめたるいろあひ(一九丁ウ)
- ⑦ 女いたう／こゑつくろひて(二二丁オ)
- ⑧ がくもんなどして侍とて。(二八丁オ)
- ⑨ はしり出ぬるに。(三〇丁オ)
- ⑩ 人き、いれず(三七丁ウ)
- ⑪ さ、ざりける。(四九丁ウ)

となる。該当する部分の慶安本は、⑤「とかくな／びきて」(一六丁オ)、⑥「つねよりも心とゞめ…」(一九丁ウ)、⑦「女いたう」(二二丁オ)、⑧「がくもんなどして侍とて」(二八丁オ)、⑨「はしり出侍ぬるに」(三〇丁オ)、⑩「人もき、入ず」(三四丁ウ)、⑪「さ、ざりけり」(四九丁ウ)となっている。

⑤は、二箇所ある。一つ目は、「とかくに」の「に」の有無である。あるのが慶安本、ないものが小本である。江戸時代の古活字本や整版本はあるものばかりで、ない本は小本のみ。写本では、陽明文庫本、伏見天皇本(古典文庫)には、「に」がなく、小本と同じである。二つ目の「なびきて」の「き」の有無。あるものが慶安本、ないものが小本。古活字本・整版本はないものばかりである。写本では、「き」のある本は、保坂本(東京国立博物館蔵)のみ。ほかは「き」がない。⑥は、「つねよりも心」の「も」の有無。あるものが慶安本、ないものが小本。これも古活字本・整版本は慶安本のような「も」のある本ばかり。小本と同じものは、写本の穂久邇文庫本のみ。こうして見ると、小本は助詞などを削除し、よりシンプルな文を志向しているように感じられる。小本が、語を削除しているものは、ほかに⑨⑩がある。⑨「はしり出侍ぬるに」は、「侍」のないものが小本である。ただし、この箇所は式部丞が博士の娘との恋愛体験を、光源氏に語るところで、聞き手に対する敬意のない小本は、疑問が残る。小本のような本文は、古活字本・整版本・写本にも確認できず、いささか強引な訂し方ではある。⑩「人もき、いれず」の「も」の有無で、これも小本には「も」がない。「も」がない本は、陽明文庫本があるが、他本には「も」が多く確認できる。小本が写本などを参照したかは不明とするほかないが、助詞などを削除していることは動かない。小本は、慶安本の小型化をすすめた。ただ小

型化、すなわち袖珍本を作ることには意外な困難があったのではないか。小本は、小型化するために、潰れやすい漢字をひらがなに改める傾向が高いが、ただひらがなが多くなると、紙幅に余裕がなくなってくる。そのため、文意を大幅に変えることのない助詞などを削除し、紙面を節約したと考えられる。

逆に、文字を添加した例は、⑧がある。式部丞が、博士の娘と知り合うきっかけが語られる場面である。博士のもとに「がくま学問などして侍とて」とある。慶安本は「て」はない。他本でもなく、小本のような本は報告されていない。ここは、式部丞が、「がくま学問などをしましょう」と思って、通っていた、とのところで、文法としては、「し」はサ変動詞「す」の連用形で、補助動詞「侍る」との間に、「て」という接続助詞が付されていることになる。サ変動詞「す」を、丁寧な表現にするという意味では、接続助詞「て」があったとしても、なかったとしても、文意は変わらない。また、文法的に誤りではない。補助動詞「侍る」の前に接続助詞「て」が付され、その「て」に接続する動詞を、丁寧に表現することはよくある。小本が「て」を付した意図は不明であるが、この「て」の下には「侍」を挟んで「とて」がある。引用を表す格助詞「と」と接続助詞「て」である。あるいは、この接続助詞「て」に引きずられて、「て」を添加したのではないかと考えられる。

ほか、慶安本を変更する例が、⑦、⑪である。⑦は、慶安本の「いと」を、小本が「いたう」に改めたことになる。これは、小本が文法的に訂正をしたと考えられる。この「いたう」は、副詞「いたく」のウ音便で、副詞「いたく」はもとは形容詞「甚しいた」が連用形で固定し、副詞化したものである。したがって「いたう」との表記が正しい。「帚木」巻では「いたう」の用例はほかに「いたうまめだちて」（三六丁ウ）が

ある。小本は、ここでの統一を図ったことになる。⑪「ざりける」は、慶安本は「ざりけり」である。「り」の字母「利」を、「る」の字母「留」ととらえてしまったのだろう。係結びを構成するわけではないため、ここを小本のように連体形で終止する文法的な合理性はない。ただ、連体形で文を終止することはしばしばおこなわれ、文法的な誤りとは言えない。連体形で文を終止することは、余情や詠嘆を込める場合が多い。ここは空蟬のもとに光源氏が忍び込む場面で、襖の掛金をためしに引き開けてみると、あちらからは「鎖さざりける」との場面である。光源氏の視点に重ね合わせられた叙述であるならば、掛金をおろしていなかった驚きとともに、空蟬のもとに忍んでいけるきっかけを掴んだ光源氏の心の昂たかぶりが描かれていると考えられ、そう考えるならば、気づきの「けり」の連体形である文脈的必然性は、ある程度は認めてもよい。

こうしてみていくと、小本の訂正には、いくつかの傾向があることに気づく。一つは、訂正には軽重があること。訂正を集中させる場合があるのだ。先に検討したように、異文注記の二例と、①～④の例のように、およそ一丁ごとに訂正が入る場合もあるが、その後は、三～五丁に一箇所ほど訂すペースになっていく。特に三〇丁を越えると、ほとんど訂正することはない。小本の「帚木」巻は、五一丁で終わる。雨夜の品定め、翌朝の場面、すなわち、空蟬との逢瀬のきっかけが語られ始めるのが、三三丁オからになるが、ここからの訂正は、⑩、⑪の二例のみ。小本の制作者は、空蟬との逢瀬は、さほど修正の要を感じていなかったことになる。前半部の雨夜の品定めでは熱心に訂正していたが、後半には飽きてきたのか、あるいは後半部の空蟬との場面は、物語に没入するあまり、訂正することを忘れてしまったのか、または別の意図があるのか、判然としないが、ともかくも小本の制作者は、物語の読み手

であったことは疑いない。小本の制作者は、物語が「読める」人物だったのである。

小本の訂正には、いまひとつの傾向がある。小本はしばしば慶安本の本文を改変するが、助詞や助動詞の削除、添加、変更で、その姿勢は文意が通じなくなる、すなわち誤謬により読めなくなるレベルのものではない。また文意を著しく歪めるものでもない。微調整のレベルのものであった。もちろん、文学的な文章であるのだから、助詞一つの削除（添加）や書き換えにより、文学性が著しく損なわれることはありうる。「微調整」が、大きな違いを生むこともありえよう。ただ、「帚木」巻での小本の訂正具合を見る限り、文学性の毀損というレベルのものではない。慶安本をもとにしながら、小本は読解に耐える本を生みだしていたことは間違いない。

おわりに

『絵入源氏』は、慶安本が最も「良い」本であることは疑いが無い。漢字にはふりがなを付し、読みやすくする工夫がなされ、おおぶりの本で読みやすい。何を以て「良い」とするのかという問題になろうが、一般の人間からすると最初に出版された慶安本が「決定版」であったに違いない。後続の万治本や小本などは、慶安本の高い評判のおこぼれにあずかるうとした、物真似の粗悪品と考えられたかもしれない。なるほど、万治本は誤植も散見され、注意を要する本であった。ただ、小本は、それなりの『源氏物語』の読み手であった人物が、慶安本を尊重しつつ、本文を訂して作ったものである。決して「読めない」本ではなく、むしろ読解に耐える本であった。そうした小本の姿は、近代文献学

からすると、校訂した本文も信用できないもので、放埒に慶安本を訂し、新たな異文を作り出したと批判され、唾棄すべき本との評価が下されそうである。ただ、物語は常に成長を続けていくと考えるならば、小本のありようは、江戸時代の『源氏物語』の成長の諸相を確かにうかがいあがらせる、貴重な本であることになる。小本が読解に耐え、研究にも用いられる本であったことは、たとえば鈴木胤が『玉の小櫛補遺』をなすさいに、小本を用いていることからも明らかである。¹³

小本の出版書肆は不明だが、吉田幸一によれば、小本の版元は吉田四郎右衛門と中野小左衛門であったという。¹⁴ 吉田四郎右衛門については、宗政五十緒により、寛文頃に開業された版元だとされている。¹⁵ 吉田四郎右衛門は、正保四年（一六四七年）に二十一代集を出版し¹⁶、しばらく後にその小型版（小本）も出版しているから、寛文よりも前の正保頃には開業していたことは間違いない。吉田四郎右衛門は、和歌・物語の出版を得意とし、さらに小型本も手がけている実績がある。『絵入源氏』の小本の出版書肆は、吉田四郎右衛門である蓋然性は高い。慶安本の小型化を、吉田四郎右衛門が誰かに依頼したのであるが、それが現在では不明である。あるいは二十一代集の小型化とも関わるかもしれないが、これもよくわからない。和歌テキストにせよ『源氏物語』にせよ、江戸時代の版本は、本文研究では等閑視されがちであるが、そのような偏見は、研究を貧しくするだけである。

ともかくも、我々は目の前にあるテキストに、真摯に向きあうほかない。

- 1 『繪入本源氏物語考』(上巻 日本書誌学大系 青裳堂書店 一九八七年)。
- 2 「慶安三年本の成立と出版」「万治版横本と無刊記小本の成立」(『源氏物語版本の研究』和泉書院 二〇〇三年)。
- 3 本稿で用いた『繪入源氏』は、慶安本は、国文学研究資料館本〔サ426/1〕を基軸に、ノートルダム清心女子大学本〔E16/541/黒川本〕、早稲田大学本〔文庫30_a0007〕を用いた。万治本は、国文学研究資料館本〔サ41/1〕の初版本(跋文「かしは屋/渡辺忠左衛門開版」)を基軸に、国文学研究資料館本〔12475/1〕の再版本(跋文「林和泉掾板行」)を用いた。小本は、『源氏物語』(日本文化資料センター 一九八四年)の複製本を基軸に、早稲田大学〔文庫30_a0152〕を用いた。ほか他本も多く参照した。
- 4 沼尻利通『『繪入源氏』三種類の字母―「帚木」巻から―』(福岡教育大学紀要)第六三号 第一分冊 二〇一四年二月。なお、万治本は、「桐壺」巻でも「津」は用いない。
- 5 意識しない誤植ではなく、板木の破損によって、結果として誤植となった例もある。万治本「よちつけ」(七〇丁オ)の箇所は、慶安本は「まちつけ」(四九丁オ)にしているが、万治本は板木に破損があるらしい。
- 6 『繪入源氏』に先行する古活字本、整版本は以下を用いた。【古活字本】慶長初年刊本(国会図書館〔WAT/1/263〕)、伝嵯峨本(大阪樟蔭女子大学『源氏物語 CD-ROM版』小林写真工業株式会社)、元和九年刊本(東洋文庫〔三Ad12〕)、寛永中刊本一種本(『古写古版物語文学総瞰』マイクロフィルム版 雄松堂フィルム出版 一九七二年)、九大古活字本(九州大学〔国文/17F/94〕)。寛永中刊本二種本、久邇宮家旧蔵本は未調査。【整版本】無跋無刊記整版本(九州大学)。亀甲括弧内の英数字は請求番号である。
- 7 「に」とする本は、伝嵯峨本、湖月抄などがある。また変わったところでは、寛永中刊本一種本は「も」とする。「も」の場合も、「爾」と「毛」の字母の近似から生じた異同と考えられる。
- 8 古写本は以下の本によった。『源氏物語大成』(巻一校異編 中央公論社 一九五三年)。『源氏物語別本集成』(第一巻 桜楓社 一九八九年)。『源氏物語別本集成続』(第一巻 おうふう 二〇〇五年)。

- 9 「おほかなるに」(二丁オ)、「人かはたぐひ給はむ」(九丁オ)、「琴のねも月も」(二二丁オ)、「かばなからふ」(二四丁ウ)、「さきまじる色は」(二五丁ウ)、「思ひまつはず」(二六丁ウ)、「おこめきて」(二九丁オ)、「なをみをとるしなむかし」(三七丁オ)、「すかくしうえまじらひ」(三七丁ウ)、「あなるしとて」(三九丁オ)、「よにみえたてまつらじ」(四〇丁ウ)。
- 10 『中島廣足全集』(第二篇 大岡山書店 一九三三年 一三九頁)。
- 11 『増補雅言集覧』(下巻 臨川書店 一九七八年 二二四三頁)。
- 12 春日和男「聴覚および視覚による表現(下)―「なり」と「めり」の消長について―」(『文学研究』(九州大学)第六〇輯 一九六一年三月)。
- 13 沼尻利通『玉の小櫛補遺』の「一本」―江戸時代における源氏物語本文享受の「様相」―(『平安文学の発想と生成』国学院大学大学院研究叢書 国学院大学大学院 二〇〇七年)。
- 14 前掲注1 一一四―一一五頁。
- 15 「吉田四郎右衛門―古典の版元―」(『近世京都出版文化の研究』同朋社出版 一九八二年)。
- 16 川上新一郎「古今和歌集版本考―前稿の補訂をかねて―」(『斯道文庫論集』第三四輯 二〇〇〇年二月)。

※本研究はJSPS科研費24720099の助成を受けたものです。

